西来寺報

（報恩講特集号）

また今年も報恩講の時期になってまいりました。

報恩講といえば親鸞聖人のご命日をご縁にあらためて私たちが仏法に触れさせていただく法会でありますが、この報恩講の儀式のさいごに読む和讃は恩徳讃といい

如来大悲の恩徳は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も
骨をくだきても謝すべし

と親鸞聖人は読まれており、これは聖人が晩年八十五歳のころの制作とされています。衆生を真実に目覚ましめてやまない如来さまのおはたらきにへの恩徳と念仏の教えを伝えてくださった方々への謝念が高らかに歌われています。

ところで、現代を生きる私どもにとって恩徳とか感謝という言葉の響きはあまりピンとこないのではないでしょうか。難しいことだけではなく、たとえば「おかげさまで」とか「有り難う」とか「不思議なご縁で」とか、ひと昔まえには日常的に使われていた言葉（もとは仏教用語でしたが）も、あまり聞かなくなりました。

また「いただきます」という言葉もその意味が薄らいでいるのではないでしょうか。「いただきます」とは私たちにとって欠かせない食物、それ自体、命であったもの、お米、野菜、魚、肉、食べ物すべてが命であり、その命をいただいてこの私が生かされておりますという言葉です。食べ物だけではありません。お日様、空気、大地あらゆるものがこの私を生かす条件となって働いてくださっている。このことを感謝するということが「いただきます」と言葉になって伝わっているのでしょう。ですから、単に食事をはじめる合図ではなかったはずです。

ところが今では、食品はスーパーマーケットやコンビニでお金をだせば簡単に買うことが出来ます。食べ物を余らせて捨ててしまっても別にかまわない、子供たちの中にも「食べ物がなくなったらコンビニで買えばいいんでしょ」と平気で残して捨ててしまっている子もいるそうです。

また、こんな話もあります。ある幼稚園でお昼の給食の時に「いただきます」といってから食べましょうと先生が言ったところ、園児がそのことを親御さんに伝え、後日、幼稚園にやってきた親御さんは「うちではちゃんと給食費を払っています。そんなもらっているような言葉を教えないでいただきたい」といわれたそうです。

つまり現代人の価値観は食べ物が命であり、その命を頂いて我が身が生かされているということをいつの間にか忘れてしまっているようです、このことは何も前出の子供たちや親御さんだけではなくこの私自身もいつの間にかこういう社会に埋没し、感覚がマヒしているのかもしれません。「恩徳」という古くさい言葉かもしれませんが、仏さまの言葉に耳を傾け、本当の意味での「恩徳」がうなずける身になっていきたいものです。

文　住職　合掌

石蕗の花

十月下旬になりますと境内のあちらこちらで石蕗が黄色い花を咲かせます。また今年も報恩講の時期がきたことを告げているようです。

二〇〇八年十月二十六日　撮影

【報恩講のご案内】

本年度報恩講を左記の要領でお勤め致します。
皆様、万障お繰り合わせのうえ、ご参詣いただき、ご一緒に報恩講のお勤めをしていただきますよう、心よりお待ち申し上げております。

合掌

《記》

◎日時
十月二十八日（水）
午後一時より法話
二時より日中法要

法話のご講師
渡辺智香　師
真宗大谷派川崎組
西福寺住職

※当日は庫裡大玄関にて受付を済ませてから、本堂にお回りください

報恩講とは

私たち真宗門徒が宗祖と仰ぐ親鸞聖人は一二六二（弘長二）年十一月二十八日に、その御生涯を終えられました。聖人のご一生は、「ついに念仏の息たえましましおわりぬ」（御伝鈔）と、まさに念仏に貫かれたものでした。宗祖が果たされたお仕事の大切さを讃え、その恩徳に感謝し報いるためのお勤めが報恩講です。

親鸞聖人御影

一人ひとりが自らの生活を振り返り、現実社会を生きていくなかで、本願念仏の教えをかけがえのないものとして確かめ機縁として、私たちは報恩講を大切におつとめして行きたいものです。

本願寺八代の蓮如上人は御文の中で（五帖十一通目）「そもそも、この御正忌にあたり、こころざしをもって参り、聖人の御前に参詣する人の中には、すでに信心を得た人もいるし、またそうでない人もいるでしょう。しかしながら信心を得ていなければ、浄土への往生はかなわぬものです。ですから不信心の人も、すみやかに決定の心をえなければなりません。」と述べておられます。御正忌報恩講は親鸞聖人の御恩に報いると同時に、自らの信心を獲得する場であることを強調しています。つまり恩に報いるとはひとえに信心を得てくださいという宗祖の願いに応えることであります。

本山では十一月二十一日～二十八日までの間、七日間報恩講がつとまります。それに先だって、あるいはその後に、全国の真宗寺院で報恩講がつとまります。

また、真宗の盛んな地域では各家庭でも、「お取り越し」または「お引き上げ」と称して報恩講が行われます。

二〇〇八年報恩講の様子

法話後のお勤め、御門徒さんと僧侶とが一体となって大きな声で法要を勤めました。また今年もこのようなお勤めをしたいと思っています。是非、ご参加ください。